

## 田原井堰および田原用水の歴史的意義 Historical Significance of Tawaraizeki weir and Tawarayousui irrigation channel

森元 純一  
Junichi Morimoto

**1. 本報告の目的** 田原用水は、吉井川中流の岡山県和気郡和気町田原上地区にある田原井堰から岡山市東区瀬戸町瀬戸地区の砂川まで流れている。田原井堰は新しく生まれ変わっているが、近世に築造された田原井堰跡や石の懸樋が岡山県の史跡に指定されており、近世の土木遺産として高く評価されてきた。これらは岡山藩主池田光政・綱政父子に仕え、「土木巧者」と謳われた津田永忠(1640～1707)によるものである。本報告では、田原用水の工事について歴史的に位置づけることを目的とする。



図1 田原井堰

**2. 田原井堰と用水の開削** 田原用水は、津田永忠より以前、寛永5年(1628)に開削されたとされる(『熊山町史 通史編』上巻, 定兼学執筆部分)。この点、近世前期における耕地拡大の一環として位置づけることが可能である。

吉井川中流域では、支流の金剛川に堤を築造し新田を開発する際に、善正坊という僧が人身御供となり埋められたという伝説が残り、寛永11年(1634)に建立された石碑が現存する。また、近世初頭、土豪の下村甚左衛門が新しく堤を築造して吉井川の流路を変え、耕地を開拓したという伝説もある。伝説ではあるが、慶長10年(1605)の「備前国高物成帳郷庄保」という文献の吉原村(現赤磐市)の項目に「新川」という語がみえ、吉井川の付け替えを示唆しており、傍証となるかもしれない(『熊山町史 通史編』上巻, 石田寛執筆部分)。中世末から近世初頭にかけては、このような耕地拡大の努力が継続されており、そもそも田原井堰と用水の開削もその一環であった。池田家文庫に残る正保期(1645～48)の石生郡図には、田原井堰の下流に用水に沿うように堤が築かれている。用水の開削とともに吉井川の流路が限定されることで、耕地の安定化を目指したと考えられる。



図2 善正坊の石碑

ただし、前述の伝説が地域の有力者による開拓とすれば、田原井堰と用水は岡山藩の普請事業の一環であった点が異なっている。注目されるのは、近世前期作成で池田家文庫に残る邑久郡図をみると、田原井堰や吉井川下流域に設けられた吉井堰・百枝月堰・鴨越堰がすべて斜め堰として築造されていることである。吉井川の井堰は大河川にも関わらず斜め堰であることが特徴で、田原井堰もおよそ500メートルの長さがあるが、岡山藩としてこの斜め堰を早い段階から採用していったことになる。

和気町歴史民俗資料館 (Wake Museum of History and Folk Materials)

キーワード：石の懸樋・河内屋治兵衛・津田永忠

3. 津田永忠と開発 津田永忠は岡山藩士であり、池田光政によって見出されのちに地方担当の責任者である郡代となる。田原井堰の改修と田原用水の延長は、津田永忠により元禄6～7年(1693～4)にかけてなされたとされる(前掲『熊山町史』定兼執筆部分)。

従来、田原井堰の改築と用水の延長工事については、その時期につき諸説あり確定していなかった。例えば、津田家が残した奉公書をひもといても、田原井堰及び用水については触れられていないのである。元禄6～7年というのは、さまざまな史料を突き合わせて得られた結論である。では、なぜ奉公書に記されなかったかといえは、他の事業の一環であったためという可能性を否定できない。

田原用水の延長については、津田永忠が関わった大事業である沖新田の開発と結びつけられる。沖新田は田原用水が流れ込む砂川の下流で干拓された岡山藩営の新田である。津田永忠は貞享2年(1685)に開発を計画したが、「砂川は日照りになると水が涸れ、それゆえ砂川」であることを理由に断念したことがある。砂川の下流では倉田新田が延宝7年(1679)に干拓され、同年吉井川から砂川を経由する形で旭川へと倉安川という用水路兼運



図3.石生郡図

河を通して。砂川からの用水だけでは需要に応じることができなかつたためである(前掲『熊山町史』定兼執筆部分を参照)。すなわち、その沖合に沖新田を開発するためには、さらに砂川の水量を増す必要があつた。ここに田原用水延長の必然性があつたのであり、永忠によるさまざまな開発は複合的に関連しつつ展開していたことが看取できる。

4. 石の懸樋 それとともに、田原用水の延長については土木技術の進歩を考えなければならない。まず小野田川を越さなければならなかつたが、ここに石製の懸樋を架けた。津田永忠は、池田家の墓所を和意谷(現備前市)に造営すべく大坂から石工の河内屋治兵衛を招いた。以後河内屋治兵衛は多方面で活躍し、石の懸樋も河内屋治兵衛の功績である。例えば、石の懸樋では普通の漆喰よりも粘土分の成分が多く配合されており、むしろ三和土というべきであるものを、漏水防止に用いている。その後、石の懸樋が昭和末期の小野田川改修まで現役で用いられていたことを勘案すれば、津田永忠が強固な構造物で将来を見据えながら計画したのであろうことが分かる。

5. まとめ 以上のように、田原井堰や田原用水は、津田永忠の指導力のもと、全体的な計画とすぐれた技術により築造されたことが理解できる。もちろん、津田永忠のその他の業績も同様に考えることができる。津田永忠はそれゆえ「土木巧者」と評されたのであり、それらは現代においても近世の土木遺産群として高く評価されているのである。